

いのちの「ありのまま」を引き受ける、 という原則からの一考察

田 中 かの子

緒言

人間的思考は、物事の全体を、すぐさま、ありのままに把握して、了解できる次元にまでは、未だ、到達していない。道具とする言語（有限の語彙）それ自体が、先後関係のある時間系列に沿って、線的な運動に終始する。「思考」回路「しか持っていないからである。恐らくそれは、脳内にある無数の神経細胞が、樹状の突起（線）を張り巡らせていることと、無関係ではないのだろう。自ずと覚りの直観からは遠ざかってしまうので、捉えた（と思う）部分を頼りに「分かった」（物事の真実を切り取った）と、いったんは納得しても、そこでは既に分けがたい事象そのものが捨象されている。その至らぬ点に気づくたび、新しく取り「分けた」（知りえた）ことを不完全ながらも補足する、という作業の連続なのである。「生命操作」

という実験的発想も然りであって、その実行に際し、完璧な準備が出来ているわけではなく、見切り発車の危険を伴うものといつてよい。たとえ善意からの行為でも、それが地球の生態系（生命体どうしの相互依存関係）のなかで引き起こしうる結果のすべてを予見し、万全の対策を講じるだけの多次元的な智慧は、持ち合わせていないのである。このような人間の持つ能力の限界を自覚し、謙虚になって（人間の身心を含む）自然と向き合える、原始の趣きを持つ島の土を踏めるのは、幸いなことである。

一 大会開催地を探索しながら、その自然を言祝ぐ大陸や島々の高所から、海に没した地底（海底）の世界に到るまで、岩石惑星の地球を形成してきたのは、活発な火山活動と、噴火後の長い歳月が育んだ自然の営みといえる。

このたびの大会開催地・大根島も、中海に浸かった溶岩台地の火山島であり、中村元記念館の裏手にみえる大塚山（かつての噴火口）は焼火権現の御山として崇められ、現在では桜の名所である。牡丹や薬用人参の栽培が始まるより遙か昔から「土地豊沃」、『出雲風土記』（七三三年）の時代は牛や馬の放牧場であった。地下の溶岩層の割れ目には、レンズ状の巨大な水溜まり（淡水レンズ）が出来るため、大千ばつの時も被害に遭わない。波入の地下湧水は、「島根の名水百選」のひとつ。有機物を含む雨水は地下（第二溶岩隧道の竜溪洞）にも浸透し、光合成の無い、常春の、湿った世界に棲む放線菌と、その泥状のコロニーを摂取する稀少生物たち（固有種）を養っている。「チビゴミムシ」や「ヨコエビ」の一種などと呼ばれている彼らだが、その起源は人類（哺乳類）の出現するずっと以前に遡る。この洞窟に棲みついて視力を退化させてもなお悠久の時を過ごすのは、「産屋」といわれる奥部の環境が、紫外線の降り注ぐ、天敵の多い地上よりも快適であるからであろう。敢えて胎内でのみ生命を育み続ける母なる洞窟から地表に眼を転じれば、母胎から外界に出て生き抜いてゆくものたちの苦勞が案じられるが、その不安も吹き飛ぶほど、地上の世界は、美しい。大会前日の朝、由志園にて独歩した際に俯瞰した自然（太古からの山鳩の声、背筋が青く光る蜥蜴、睡蓮の花、玄武岩の塊）は、御神体の勾玉作りに翡翠や碧玉の緑色を好んだ、古代人の瑞々しい生命観を想像するよすがともなり、「出生と生命」と

いう題のパネル企画がこの地で実行されることの因縁について、深く考えさせられたのである。

二 「自然の手のひら」からは、抜け出せない

人間の科学技術が専横を極めるようになるのは、自然なしには生きられない自らの境遇を省みなくなるほど、人間の拵えたものが、自然とは別物に見えてしまうことも関係があるのではないか。例えば、都会の高層ビルは、森の中の丸太小屋と対比すれば、いかにも、「人間が築いた」文明の輝かしい成果に見えるかもしれない。しかし、よくよく考えてみれば、高層ビルもまた、天然資源（地下に沈殿した生物の遺骸などから成る石油を精製した化合物その他）を材料としており、人間がまったくの無から創造した建材は、存在しない。たとえ、自然界には無い物質を発明したと豪語しても、既存の原子を人為的に組み合わせたものに過ぎない（オゾン層を破壊し、地表の紫外線強度を上げてしまうフロン分子などは、その好例である）。つまりは、真正正銘の「人工物」といえるものが何もないこと、いかなる高度の科学知識を以て大気圏外に飛び出したとしても、生まれ育った地球環境に勝るような場所を見つけないのは恐らく困難であろうことを、現代人は、再認識すべきなのである。それはちょうど、慢心の高じた孫悟空が筋斗雲に乗って、釈迦如来の右の手のひらから飛び出そうとしても果たせずに、その罪業を償わされたという話を連想させる。

三 「母胎という自然」のはたらきに委ねる

人間の誰もがそこから産まれてくる「母胎という自然」は、いかなる生命操作を試みる場合でも見限ることができない、いのちを守り育もうとする、予測不可能な、未知のはたらきを蔵している。例えば、「試験管ベイビー」（体外受精）とはいっても、ガラス容器内で受精・培養を施した受精卵は、母胎（子宮内）の自然環境に委ねられなくてはならない。失敗のリスクを覚悟のうえで、出生までの経過を、辛抱強く見守るしかないのである。自然分娩で産む／産まれる場合と比べて、産んだ女性と出生した子どもの（身心の）健康状態、両者間の人間関係などにどんな問題が生じうるのか、といった「不自然」の処置の影響については、十分な研究がなされていない。なかでも、「優秀」と見做される遺伝子を利用した「天才児」作り（人工授精）などは、子ども本人の自発的な努力と周囲からの影響によって徐々に熟してゆくであろう才能（個々に与えられた天賦の才能、即ち天才）の開花や、名利を離れてこそ輝く人格の価値を頭から否定してしまう、「自然」に最も反する行為であるといえよう。親の所有物ではないばかりか、誰の予想どおりにもならない「自然の産物」として成長してゆく子どもの生命力を尊重するためにも、「母胎という自然」という原点に立ち戻り、そのはたらきに信頼して、委ねる勇氣を持つ必要があるのではないか。

四 いのちの「ありのまま」を引き受ける、 という原則の意味（幸福論）

ここにいる「ありのまま」とは、子どもに与えられた「自然」のいのちが、精神的にも身体的にも変わりうる可能性（強さ・脆さ・尊さなどの循環）を持つだけではなく、生きてゆくうちに、障害を克服する力が、自ずと身に具わるであろうことを見込んだ表現である。そこでは、産むべき「いのち」と産むべきではない「いのち」という分け隔ては通用しない。両性の合意によらない強制的な妊娠や母体の危機といった、考慮に値する「例外」はあるものの、その他大勢のケースにおいては、産むのが原則なのである。

（宗教思想の基本から説き起こせば）出生までのどの段階であるかにかかわらず、文字通り、父母未生ぶもみしょう以前の生死流転の時空において、人間の身を受けることの有り難さ（稀有の果報）を自覚するならば、めぐり会った親と子の「縁えん」に、断ち切ってもよい一線があるわけではない。或いは、神の息吹を受けて生きる者となった人間の起源に遡れば、いかなる「容認しがたい／困難な」状況下の誕生でも、祝福された一度限りの生涯、という賜物であることがわかる。本来、生まれいずるべきものの真実相（ありのまま）を積極的に「引き受ける」のが、敬虔な智慧に基づく生き方であるとすれば、「自然」の法則、もしくは、「自然」を統べる神の摂理に介入して、いのちの宿

った母体の「自然」を改変しようと試行錯誤を繰り返すのが、現代の科学技術であろう。この対比を謙虚に洞察してみると、「自然」を操ろうとする「呪術的」態度をいっそのこと諦めて、「自然」のはたらきを畏敬する「宗教的」態度に切り替えてしまったほうが、人生の幸福を追い求める人間の願いを、より確実になかえることができるのではないか、とさえ思われてくる。

親の都合や思惑を超えて、ひとたび母胎に宿った者には、生きべき何らかの意味（使命）が厳存し、非言語的生育の途上にあっても、母の身心と直結した、胎教さえ可能な、一個の人間であることに変わりはない。胎内で抱えた障害も、老いや病という万人の課題を伴って、心の豊かさを涵養する試練となり、健やかな、真の幸福をもたらしうるものである。五体満足で産んでもらっても、行ないによつては、不自由や不幸を招きもする。人生の苦難を体験し、それを乗り越えた者は誰でも、人の情けを知り、世間の非情さからも学ぶ。我が子が障害を負って生きることを不幸と決め込む人には、いま一度、熟考の間を確保し、苦勞すればするほど磨きがかかる人間性の「自然」を見直してほしい。

例えば、ダウン症の子どもを宿したことを出生前検査で知った場合、人工妊娠中絶を希望する母親が九割に及ぶという事実を受けて、玉木孝則氏（脳性まひの障害を持つ障害者相談支援専門員、Eテレ「バリバラ」障害者情報バラエティー）番組の

レギュラー、二児の父）は、「障害児として生まれた子どものこれからを、大人が勝手に想像して）ストーリーを作らないでほしい」（括弧内は筆者の補足）と語りかける。都合の悪い、面倒なことを回避できたと思っても、望みどおりの人生を築こうとする途上では、また別の様々な苦難が、何度でも訪れるであろう。ならば、思い切って「ありのまま」を引き受け、安易な介入（生命操作）を慎むのが、いのちの「自然」に順応する最善の道、ということになる。

五 いのちの「ありのまま」に

向き合わなかった場合の「その後」

生命操作の技術を開発する者たちは、操作をし終えた生体の「その後」にも、積極的な関心を持っているのだろうか。実施を試みるだけで、あとの責任までは、到底、負い切れないはずである。なかでも、人工妊娠中絶が、「母胎のリセット」ではないことに注意したい。生育の途中で「いのち」を絶たれた子どもの記憶は、処置（掻爬術など）による傷を残しながら、第三者には測りたい心の影（罪の意識）を、母親の生涯を通じて投げかけることになる。望まれて生まれてきた子どもに、絶された兄・姉がいたことを親は、正直に打ち明けるのか、黙りとおすのか。いたはずの兄・姉がいらない理由を、弟・妹になる子ども自身になって考えておくだけの責任を負う覚悟がないまま、中絶を決断する母親の「その後」が案じられる。成長し

てゆく弟・妹の人格形成に及ぼす影響も心配である。

六 ヒトの人間たる所以とは何か

ヒトの人間たる所以を、出生後に習得した「言語」を用いる思考と意思伝達の能力に求めようとすると、厄介な問題が生じる。なぜなら、意思伝達のできない状況にある胎児と「脳死者」(実際には「脳の機能不全に陥った者」)が、生命操作や臓器摘出の対象としてクローズアップされてくるからである。脳不全となった者でも、脳波の語り得ぬ意識や感覚を留めている可能性がある以上、臓器を欲する他者の期待どおりに、人としての死を遂げた状態とはいえない。言語習得前の胎児であっても、脳の神経回路が発達するにつれ、母子の絆も深まり、胎内記憶を持つようになる。胎児は、「脳死者」の蓄積している一生の歲月とはどこまでも隔てられているが、生存の始めと終わりを代表する両者の「いのち」の重みは、平等である。しかしながら、男女の産み分け、代理母出産、出生前検査を踏まえての中から、三つ子の選択的分娩などの、完全に一方的な操作・選別・排除を拒む言葉もない前者においては、天賦自然の人權さえ損なわれている。人間の証明を思考力に求める態度には、キリスト教思想におけるロゴスの優位(「初めに言ありき」ヨハネ一・一)や、考える人間の尊厳を宣言する西洋哲学(「我思う、ゆえに我あり」デカルト)との関連性も認められるが、無言の無力な存在(胎児・「脳死者」)に対する恣意的な振る舞いに歯止

めの利かない現状からは、理性を抑え込む人々の欲心しかみえてこない。ゆえに、欲心を統御しながら人生に立ち向かう勇氣ある態度こそが、真の人間らしさだということになる。

七 日本人の暮らしに活きる「くなる」事象の再評価

西洋医学が主導的であり、ism, -ty, -ismなどを多用する機能的な一言語である英語の学習が、国語教育を圧する勢いで奨励される日本の社会で「いのち」をめぐる主体的な議論を深めるには先ず、思考する際の母語を、熟れた形にしておく必要がある。例えば、「生命のメカニズム」という語に違和感を覚える感性を失わないこと。生命体は、部品を修理・交換すれば一様に再生するもの(「メカ」)ではなく、個々に異なる特性を示し、星間物質や天体よりも遙かに複雑で、意図的な働きをする。その測りがたさは、変わりゆく現象の諸相を捉えた「なる」(成る・生る)、「ある」(生る・有る)、「うむ」(生む・産む・埋む)といった一連の大和言葉にみられる古来の「生命」観と共鳴する。母国の「自然」に生り坐せる神々が取り結ぶ「親子の」(縁)に立ち帰り、「くなる」事象の表現なしには成り立たない日本人の暮らしに、あらゆるものの和らぎと幸い(新生)を実現しようとする(「仏教や道教との親和性を示す神道の」)精神文化の創造性を、再発見すべきなのである。

結語

本稿で述べてきたような事柄を、最も身近に受け止められるのは、近い将来、結婚して子どもを持つことになる若者たちである。担当科目が何であれ、授業時間に一度でも、生まれてくる／生まれてきたことの意味を真摯に問いかければ、それなりの反響があることを、教育者としての経験から明言できる。「いのち」をめぐる彼らの問題意識に、希望を託したい。

- (1) 拙著『比較宗教学「いのち」の探究』新装改訂版第四刷(毎年、改変増補)、二〇一四年、二五七頁(用語解説の「類型論」参照)。
- (2) 本節のなかで記述した大根島の自然環境については、沢田順弘、新部一太郎、星川和夫著『大根島のおいたちと洞窟生物』松江市ふるさと文庫2、二〇〇七年、一九〜二二、四五頁の研究成果を参照した。
- (3) 島根県古代文化センター編『解説 出雲風土記』今井出版、二〇一四年、七九〜八〇、八三頁。「蛸蛸島(転訛以前の古名)」と呼ばれる以前から、土地神の社が点在した。
- (4) 註(1)と同著の註(14)。一九一頁の挿絵②(著者作品)では胎児説を設定。
- (5) 太田辰夫、鳥居久晴訳『西遊記(上)』平凡社、一九七一年、六二〜六五頁参照。
- (6) 二〇一四年六月一三日放送(同年、六月一七日再放送)の「出生前検査② ダウン症の青年が大学で特別授業!」の最後に、玉木氏がコメントした内容からの引用。
- (7) 各国人の、文化の香り高い肉声(母語)から直に学ぶことが、国際人を育てる。英語経由の知識や情報に依存する限り、世界はみえてこない。

(たなか・かのこ、仏教学・比較宗教学、駒澤大学非常勤講師)